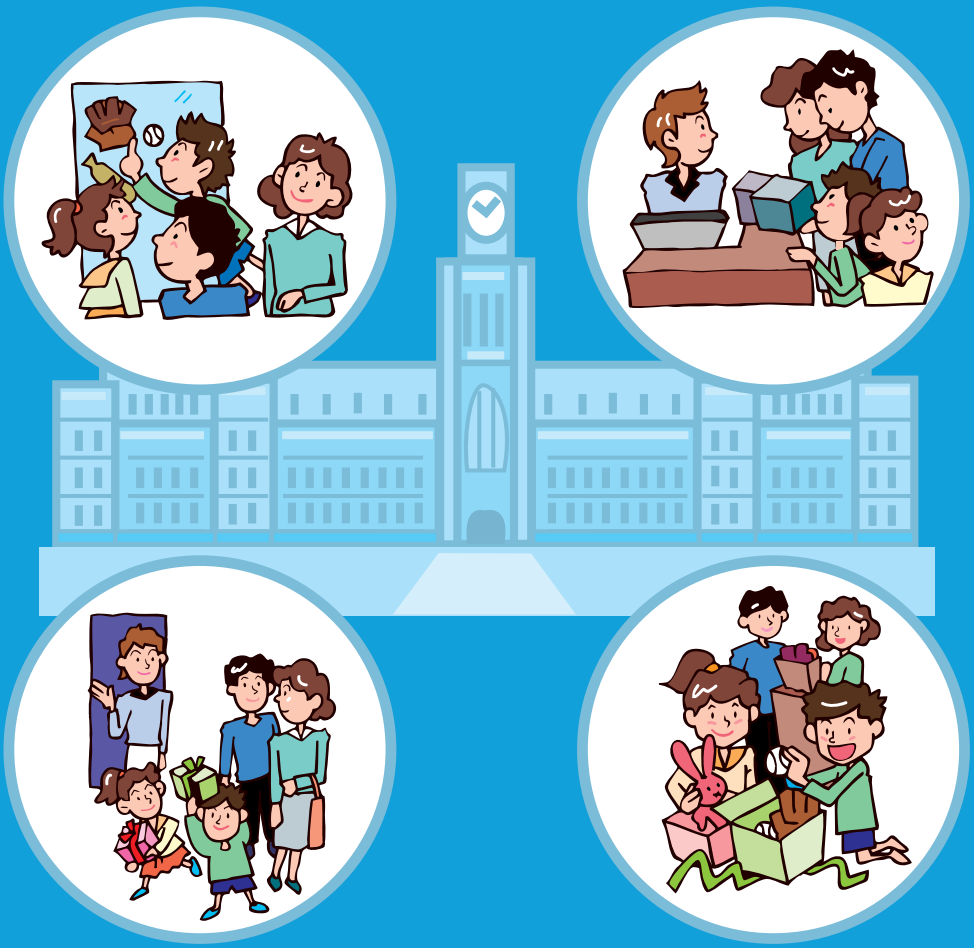
商店街近代化推進シリーズ50

産学連携による商店街の活性化



産学連携による商店街の活性化

＜ 目　　次 ＞

1．商店街における産学連携の現状 …… 1

(1)　商店街と産学連携の意義 …… 1

(2)　産学連携の現状 …… 2

2．商店街における産学連携の進め方 …… 3

(1)　産学連携のきっかけづくり …… 3

(2)　産学連携の活動内容 …… 4

(3)　産学連携の資金 …… 6

3．商店街における産学連携の今後の課題 …… 7

(1)　産学連携の課題とステップアップ …… 7

(2)　これからの産学連携を活用した活動内容例 …… 8

4．商店街における産学連携の事例 …… 10

(1)　東京都新宿区･神楽坂商店街振興組合 …… 10

(2)　東京都練馬区･栄町本通り商店街振興組合 …… 11

(3)　愛知県半田市･半田駅前商店街振興組合 …… 13

(4)　愛知県瀬戸市･銀座通り商店街振興組合 …… 14

１．商店街における産学連携の現状

⑴　商店街と産学連携の意義

①　地域コミュニティと大学

人が生活を行っていく上で、どうしても帰属しなければならない集団があります。最も基本的なものは家族集団で、職域集団、地域集団も欠くことのできない帰属集団です。戦後の都市化、郊外化の波の中で失われてきた地域社会との連携や地域社会に対する帰属意識は、いま新しい装いのもとでその重要性が問い直されています。

生活の質や豊かさを求める中で、かつての地縁社会とは性格を異にした地域コミュニティとの関係を大切にしようとする意識が高まっています。

地域に根ざした商店街にとって、地域社会との関係は昔からきっても切れない関係にありました。地域社会の消費者が最も重要な購買力で、売り手と買い手の関係にありました。近年、以前にも増して商店街と地域コミュニティの関係は、より密接になりつつあります。まちの生活の安全性、災害時での商店街の役割の重要性、高齢者の人たちに対する心づかい、日々の生活における生活文化の各領域において果たす商店街の役割の増大などです。

小学校、中学校、さらには高等学校と進むにつれて学校と関連が薄れるものの、学校は地域コミュニティの一員として、関係は密なものがあります。大学は比較的地域コミュニティとの関連が疎であるとみられます。しかし、大学が立地する地区では、一部の学生はその近隣に住居を持ち、通学する学生や職員も１日の多くの時間を大学のある地域において費やしています。近年、大学、学生、職員ともに地域コミュニティの一員としての意識が高まり、地域コミュニティ活動への参加や、大学の持つ知識を地域に伝えたり、福祉や環境などの面で地域社会に対して貢献する活動も活発になりつつあります。

②　産学連携の意義

商店街にとっては大学と連携することにより、商業者の持つ経験だけではなく、大学側が持つ商活動、販売活動、販売技術など、商業分野における知識、知恵、技術などを活用することができます。ＩＴ技術の商業活動への適用や応用

という面で、大学側が持つノウハウは重要なものとなります。また、大学側が持つまちづくりについての知識やノウハウを商店街の活性化に生かすことができます。まちづくりのノウハウを活用することは商店街にとっても、また大学にとってもこの実践活動は研究テーマとして意義あるものといえます。

大学は商店街の活動に実際に関わることによって、理論と現実とを結びつけることが可能となります。商品の販売、商経営、独自の商品開発などに理論と現実の実践、検証を行うことによって、得られるメリットは大きいといえます。商店街も大学側から得られる優れた情報を実際のマーケティングやマーチャンダイジング活動に適用できるという利点があります。

重要性が増している環境問題、福祉問題についても、大学の持つ知識、ノウハウ、人材を商店街において活用することによって地域及び商店街にとって大きな恩恵がもたらせます。

以上のように、商店街と大学はともに地域コミュニティの重要な部分を形成する構成者として互いに連携することになります。まず地域コミュニティをベースとして連携がはじまります。そして、次の段階では地域を越えて、商店街と大学が技術、ビジネス、研究等において連携することにより互いの本業の機能増進に反映させる、これが商店街における産学連携の意義といえます。

(2) 産学連携の現状

大学においての産学の連携は、各地でさまざまな形態、内容で行われています。小・中・高校では、授業、授業外活動を問わず、学校自体が連携の窓口になっている例が殆どです。大学では、学校対応に加えて、クラブ、同好会等が窓口になったり、学生グループ、ゼミグループ、個人、教授個人等、対応の形態が多岐にわたっています。連携の内容も、小・中学校や高校に多い各種の活動の発表の場を提供したり、商店街が行うイベントに参加したりすることに加えて、本格的ビジネスゲームとして、さらには学生の実践的な起業支援として学校が対応している例もあります。また、ゼミの研究テーマとして“地域や商店街の活性化”をとらえ、活性化の方針や方策を具体的に検討し、その成果を地域に提案したり、その実践を支援している例もあります。商店街の調査研究を受託したり、計画や企画づくりに参加協力したり、商店街の組合運営にアドバイザーや組合員外理事として参加することもあります。また、体験や実験的

にあるいは本格的に商業活動をしたり、交流のためのサロンスペースとして借り受けている地区もあります。クラブや同好会の発表の場も、単発的なイベントの形態をとらず、継続的に活動できるスペースを、空き店舗等を利用して商店街の中に確保している例など多岐、多様です。

2．商店街における産学連携の進め方

(1)　産学連携のきっかけづくり

①　商店街の呼びかけ

商店街では、空洞化が進行しており、活性化の方向、方法について模索しているところが少なくありません。新しい発想を持ち込むことをめざして、商店街の側で地元の大学や学生に対して支援、協力を求める例が増えています。個人、個店で大学や学生に“ツテ”を持っていることもあれば、“飛び込み”で大学や学生グループに新たに接近することもあります。

②　行政の呼びかけ

商店街と連携しながら、また、都道府県や市区町村などの“官（行政）”が単独で呼びかけて連携を図る例もあります。都道府県の場合は単独商店街との連携ではなく、広域にわたるものが中心となります。市町村では自発的に、また、商工会・商工会議所や商店街の要請で、「研究提案型」や「活動組織支援型」の産学連携を呼びかけることもあります。市町村が、地域の活性化に向けて、専門的知識の提供を大学に呼びかける例もみられます。

③　大学の呼びかけ

商店側ではなく、大学側から連携を呼びかけることも増えています。呼びかける主体は大学の事務局であったり、教授であったり、クラブ同好会であったり、学生の個人グループであったり様々です。大学事務局や教授からの呼びかけの場合、教科や教材のデータ収集に使ったり、公開講座の開催や課外授業の場としての要請などが多くなっています。クラブや同好会の場合は、活動内容に合わせた市民との連携活動を行ったり、活動の報告の場や発表の場として要

請がある場合が多くなっています。クラブ、同好会が、商店街イベントに合わせて、模擬店などを出店することもあります。

④　学生の自主参加

商業活動の体験、経験のためや、チャレンジショップへの参加、中には収益のための参加協力があります。まちづくりへの参加協力も、個人参加がみられます。まちづくりのためのワークショップへの参加や、大学院生となると委員会への委員参加もあります。最も多いのがイベントへの参加で、情報提供、企画立案やアトラクションの開催、参加支援などがあります。

(2)　産学連携の活動内容

①　研究提案型活動

大学側が自発的に、あるいは地方自治体や商工会・商工会議所、商店街等からの依頼により、地域の市場調査、ニーズ調査、商業者意識調査などを行ったり、今後の商店街の方向、方針、活性化のための方策等や活性化のための計画等について提案する活動です。学校、教授側で準備する講座のテーマとして、またはゼミなどの研究テーマ、課題として採用されています。この連携は、大学が先導する場合が多く、商店街はむしろ情報収集、情報提供等を受け持ち、受け身の立場になります。ワークショップなどの開催を通して、商店街構成員や地域住民、地域関係者等もこれらの検討作業に加わる例も増えつつあります。

②　組織支援型活動

継続的に商店街の組織運営に参加協力したり、事業活動に指導支援または協力支援する活動です。研究提案型活動の成果に次ぐ次のステップとして行ったり、当活動単独で行うこともあります。組織運営に対する支援としては、組合のアドバイザーになったり、員外役員、役員としての分担を担ったり、準組合員などの構成員の立場で参加するなどして、理事会やその他の会合に参加して、法律、経営、技術などの専門的知識や情報を持って支援するなどがあります。事業活動面での支援とは、イベント参加型活動と似ていますが、単発支援か継続支援かで異なります。商店街が開催するイベントや催事、その他の事業に対し

て、技術などの面で専門的に、または人的に協力支援する活動をいいます。事業活動の企画の立案やプロデュースの指導や支援、さらには各活動の実施に際しての技術的、専門的支援や人的応援があります。学校の講座のテーマとして、ゼミなどの研究課題として採用されるとともに、個人で、グループでと、商店街やまちに興味を持ちながらの任意参加による活動もみられます。

③　イベント参加型活動

商店街のイベントや催事などへ参加するこのタイプの連携が現状の活動として最も多いとみられます。特定商店街との継続連携を必ずしも前提とせず、イベント、催事などへの単発、単独の参加も可能です。大学（または学生）が企画立案、活動実施を先導する方式、商店街が主導する方式、大学(または学生)が商店街の企画に沿って特定活動を分担し活動実施を先導する方式、両者が話し合いを進める方式など様々です。活動の具体的例としては、イベントの企画、プロデュースを担うことに加え、縁日露店の開設、研究活動の発表、同好会･サークルのパフォーマンス、交流イベントの開催、シンポジウムの開催、ワークショップの開催、パソコン教室、ライブ･コンサートの開催など多種多様です。

④　商業活動実践型活動

商店街において、実際の商業活動を行い、体験や実験、さらには起業活動を行ったりする活動です。商業活動は、飲食店や物品販売店舗の経営、サービス業店舗の運営など多彩です。商店街において大学またはその関係者が商業活動を行う動機や目的は様々です。学生個人の商業活動の体験や商業活動の実験、さらには起業に向けての取り組みがあります。一方、大学の講座やゼミにおけるインターンシップの一環として実施したり、大学が学生の起業を支援する、大学自体が対応する取り組み例もあります。

(3)　産学連携の資金

資金の負担については“産”側で行うもの、“学”側で行うもの、双方で行うもの各種あります。しかし、実態は、大学や学生側での資金提供、負担の例は少なく、商店街が各種の支援策を活用しながら負担している例が多くみられます。

とりわけイベント事業などでは、学生側が企画・運営に参画するものや、自ら支援の労力を提供するもの、自らが参加するものがありますが、いずれもイベント事業における費用負担は商店街側によるものが大半です。チャレンジショップ事業では、都道府県や市町村等の行政の補助支援により事業を展開している例が多くみられます。学生は、自らが店舗に入り、そこで企画・運営を行うものです。しかし、中には、学生自身が出資してＮＰＯ等を設立し、有料で行政や商店街から事業の委託を受けている例もあります。

3．商店街における産学連携の今後の課題

(1)　産学連携の課題とステップアップ

①　継続する産学連携

現状の産学連携は、学生個人またはグループによるイベント等参加協力という初歩的形態が中心です。この連携は、継続性に欠け、単発もしくは一時的連携が中心となります。このため、学校対応の形態を優先させていくとともに、個人、グループ対応においては、連携する学生側に継続性を求めるか、単発または短期間の連携を商店街側がプロデュースして継続事業として展開していくか、いずれかの対応が必要となります。いずれにせよ、産学連携は、単発、短期間の“イベント”に終わってしまっては、その期待される効果も少なく、産側、学側いずれかの側で継続できるように誘導していくことが求められます。

②　信頼関係の構築

産学の連携は、双方においての信頼関係が不可欠です。双方の信頼関係は1回の連携事業や短期間で構築されるものではなく、継続した関係の下に形成されるものです。資金の負担、資金の支援を行うに際しても、また、精神的、技術的な支援についても、両者の信頼関係が基礎となります。とりわけ、大学が直接窓口になり、総合的連携を図る場合においては、時間をかけた信頼関係づくりが求められます。

③　動機及び目的の確認

工業分野における産学連携は、技術の供与と研究費用の支援という比較的単純明瞭な動機や目的の下に行われているものが中心です。これに対して商業分野においては、連携に際しての動機や目的が多様であり、不明確です。目的をあいまいに開始し、事業を続ける中で双方が確認し、明確にする“試行錯誤方式”もあります。しかし、あいまいなままでの連携は、混乱、トラブルのもとであり、少なくとも連携を進めるに際して、目的を明確にし、双方が確認した上で連携内容を決め、連携を進めることが望まれます。

④　社会貢献の強調

商店街においては、単なる商業活動の展開だけではなく、地域における存在と“社会貢献”がより強く求められています。大学においても、その役割は、研究、教育と合わせて“社会貢献”にあるといわれています。商業分野における産学連携のキーワードは、“社会貢献”であり、この「社会貢献」の共通項を通して、産学連携の形態、内容を探る必要があります。大学側においては、様々な地域活動への支援とともに、地域の一員としての積極的な関わりが望まれています。“支援”の視点に加えて、“主体”としての対応が求められています。

⑤　コミュニティビジネスの対応

商店街と大学との連携は、大学側からの視点でみると、「研究」のテーマ、素材として商店街を把えての連携があります。また、インターンシップや公開講座などを通しての「教育」の分野で連携があります。社会貢献の一環として、地域行事への参加や協賛、主催があり、これは「交流」の分野です。これらの連携分野に加えて、今後は、地域の主体、地域の一員としての対応、連携が望まれ、ＮＰＯやその他の地域団体との連携を図りながら、コミュニティビジネスへ積極的に関与することが望まれます。

⑥　インターンシップの積極導入

研究支援やイベント等の活動参画などの連携形態を継続しながら、今後、より積極的な連携が望まれるのがインターンシップです。事例からも、継続性があり、連携が密で、双方にとってより成果が上がりやすいものと思われます。大学側の「教育」の一環として有効であり、実践的インターンシップにおいては、職業意識の醸成に加えて、起業面人材育成をも視野に入れたプログラムとなります。この成果により、より水準の高い“商人”の育成が期待でき、この育成プロセスを通じて、地域の商店街にもたらす物心共の貢献は大きいものと期待されます。

(2)　これからの産学連携を活用した活動内容例

商店街が地域社会において果たす４つの機能に沿って、次のような産学連携

の活動内容が考えられます。

①　商業機能

・個店の経営指導
・空き店舗を利用しての大学側での経営、または商店街との共同経営
・共同での商品開発
・ＩＴ関連技術の商店街での利用
・学生の商店街での実習活動

②　コミュニティ機能

・共同での商店街、まちの清掃、美化
・商店街の花かざり運動
・商店街のイルミネーション
・学生によるシャッターペイント
・リサイクル運動とリサイクルショップの経営

③　まちづくり機能

・産学共同での通行量調査
・同じく来街者アンケート調査
・商店や商店街の診断、魅力度診断
・産学連携による商店街活性化計画づくり
・まちづくり計画の作成

④　生活文化機能

・祭り、市、バザールなどのイベント
・商店街の中での公開講座
・産学連携での芝居、落語会などの開催
・大学の職員や学生によるコンサート、絵、書道などの作品の展覧会
・絵、焼きもの、書道などの展示即売会

4．商店街における産学連携の事例

(1)　東京都新宿区・神楽坂商店街振興組合

①　商店街の概要

神楽坂商店街振興組合は、ＪＲ中央線「飯田橋」駅より任意商店会をはさんで東西線「神楽坂」駅までが神楽坂商店街振興組合です。組合員は160で、組織を昭和58年に法人化しました。周辺には、「東京理科大学」、「法政大学」等があります。

②　産学連携の事業

・ゴミゼロ運動

ゴミゼロ運動は、環境に取り組みゼロ・エミッション（廃棄物ゼロ）を目指した取り組みで、平成９年より継続して行っています。大学のキャンパスエコロジーと協力し、商店街、法政大学、機械メーカー、市民、行政を交えて研究会を開催しました。平成12年に生ゴミ処理機「かえる君」を商店街に設置しました。飲食店や家庭から出る生ゴミを乾燥させて粉塵にし、生ゴミの粉塵を農家で堆肥にし、有機栽培を行い、収穫した野菜を販売するという循環農法を展開するものです。

・新内鑑賞会

平成14年から、新内節浄瑠璃の鑑賞会「鶴賀若狭掾　新内を楽しむ会」を法政大学と共催で開催しています。

・街飛びフェスタ

伝統とモダンが交差する、まちの文化祭と称して、神楽坂で数々のイベントを行っています。法政大学の学生グループ、理事、環境対策室などが参画して「神楽坂まち飛び実行委員会」を結成して、企画を立てています。商店街を歩行者天国にして、イベントを実施しています。市民、学生、一部プロ芸術家などが参加して自由に絵を描く「坂にお絵描き700ｍキャンパス」や「アートマーケット」の他、「ミニコンサート」、「大学のロボット研究」、「界隈の学生活動紹介」等の学生との連携を進めています。

・メンバーズカード

地域共通ポイントカード「神楽坂ファンくらぶカード」の計画を進めています。大学生が地域住民の介護補助を行ったり、災害時に救出する意向を示す大学生に、カードを配布しポイントを付加して、商店街での買物が可能となるようにするものです。

・街づくり

神楽坂商店街振興組合には、大学の教授や教授と学生グループなどとの日常的な交流があります。近隣の東京理科大学、法政大学の教授や学生グループ等が、商店街にアドバイスを行っています。また、街路に情報ボードを設置して、そこに商店街の情報と合わせて大学情報（大学行事、休講等）を掲示することを検討しています。

(2) 東京都練馬区・栄町本通り商店街振興組合

① 商店街の概要

栄町本通り商店街は、西武池袋線の「江古田」駅から地下鉄有楽町線の「新桜台」駅に路線形に続く駅前商店街です。組合員は83で、“地区中心型”の商店街です。周辺には、「日本大学芸術学部」、「武蔵大学」、「武蔵野音楽大学」等が立地し、後背地は住宅地であるとともに学生の多い地域特性を持っています。

② 産学連携の事業

・「江古田計画」

平成12年から３ヶ年に渡って、江古田地区で「武蔵大学、武蔵野音楽大学、日本大学芸術学部等の学生」、「30代の子育てをしている主婦」、「50、60代の主婦」の３グループに分けて消費者懇談会を行いました。学生グループから、「江古田を活気ある街」に出来ないかという意見が出され、「江古田計画」というグループを結成しました。

江古田計画が中心となり、ビニール袋「江古田袋」を作成したり、「アートマーケット」を年に２回開催しています。

・ファミリーコンサート

江古田駅北口商店会・武蔵野音楽大学・江古田斎場が「ファミリーコンサート」を年１回開催しています。

・シャッターペイント事業

平成13年、日本大学芸術学部デザイン科の学生により、街のシャッターをキャンパスにして絵を描きたいとの要請があり、商店街で５店舗の店のシャッターを提供しました。以降、隣接商店街も含めて平成14年は14店舗、平成15年は９店舗で実施しています。

・ナイトバザール事業

「江古田ナイトバザール」は、商店街で奇数月の第４土曜日（午後５時～８時）に実施しています。各店の売り出しや、各種のイベント（物産市、野菜の即売会、テレビドラマのヒーローショー、バナナのたたき売り等）が賑やかに開催されています。高校、同好会、ＮＰＯ法人、中学校の吹奏楽部、シルバー人材センターなど地域からの参加が多いのが特徴です。この「ナイトバザール」に、日本大学芸術学部演劇科の15人程の学生有志が毎回のように手伝いに来るようになりました。模擬店の手伝い、会場や自転車、人の整理などの手伝いをしています。卒業時には、申し送り事項として下級生、新入生に伝えており、学生有志グループの応援は続いています。日本大学芸術学部の学生は、商店街にとって大切な「サポーター」と言えます。なお、商店街でも、大学祭時にパンフレットに広告掲載して協力したり、新入生の合宿にスポンサーとして支援などを行い、日頃からの双方の交流がなされています。

・コミュニティビジネス研究会

武蔵大学と商店街、区、商工会議所等で、コミュニティビジネス研究会を開催しています。この成果として、平成16年11月の、「第51回江古田ナイトバザール」に武蔵大学の学生が６店を出店しました。武蔵大学では、授業の一環としてコミュニティビジネスを取り上げており、学生が自ら仮の株式会社を設立し、今回の出店に際しては、学生自らが焼き芋販売、石鹸の販売などの商品の調達を行っています。

⑶　愛知県半田市・半田駅前商店街振興組合

①　商店街の概要

半田市は愛知県にあり、名古屋市の南、知多半島の中央部にあって、人口約11万人を擁しています。当商店街は、ＪＲ半田駅前から面的に広がり、中心商店街の一角を占めています。背後には、商店街に隣接して、“ミツカン酢”の本社工場があり、“運河”とともに個性的な街並みを形成しています。組合員数は68で、以前は“地域中心型”の商業機能を維持していました。しかし、立地環境の変化により、商店街内の核店舗が撤退し、一般商店の空き店舗が増えて苦戦を続けています。

②　産学連携の事業

・チャレンジショップの概要

商店街の中の空き店舗を利用して、学生がチャレンジショップを開設し運営しています。商店街の中の空き店舗を、隣接町にある日本福祉大学の学生が借り受け、雑貨店を開店しました。店舗面積は約60㎡で、ビーズ、中国雑貨などを販売するとともに、工芸教室を開催したり、中国茶によりもてなすなどをして、地域の人が気軽に立ち寄れるコミュニティの場を目指しています。開店は平成16年２月26日。当初は、17年３月で４人の学生が卒業するため、就職準備等で16年９月までの約束の開店でしたが、商店街の要請もあり、その後双方が話し合って17年２月まで延長することになりました。店名は“半田”の字をもじって「畔（あぜ）」。４人の学生が共同で経営しており、学生が交代で店番に当たっています。

・店舗の運営

店の使用契約は家主と学生で行っています。開店に当たっては、学校は開店資金の一部を支援し、店舗の改装は商店街の手を借りながら、学生達で手作りで仕上げました。商店街が店のチラシや商品カタログを作成して宣伝を手伝ったり、経営面でのアドバイスをする等して協力しています。

・店舗開設のきっかけ

それまでにも、要請を受けて委員として、街づくりのための研究会に教授が

参加するなど、日本福祉大学と商店街との接点はありました。本事業については、実際に店に立って経営の勉強がしたいという学生と、空き店舗の対策を検討する商店街の思惑が一致して開始されました。このチャレンジショップの開設は、あくまでも学生個人の対応であり、出店の意思決定には直接学校は関わっていません。

③　商店街の評価

飲食店やサービス店の出店はあったが物品販売店の出店はなかったため、商店街では大歓迎しています。この学生ショップの開店がきっかけとなり、各所に波及して再び賑わいが戻ってくることに大いに期待しています。

また、「畔」の開店は、地域住民の利用を誘導しているとともに、商業者に対して精神面でのインパクトを与えているようです。

(4)　愛知県瀬戸市・銀座通り商店街振興組合

①　商店街の概要

瀬戸市は名古屋市の北東部にあり、名古屋市の中心部から約20ｋｍにあり、人口は約13万人の都市です。銀座通り商店街は、名鉄線「尾張瀬戸」駅より徒歩５分に位置しています。歴史は古く、深川神社の門前町として大正から昭和の初期、縁日の日には、多くの人でごった返したといわれています。商店街の通りはやや蛇行する路線形で、幅員は６ｍ以下と狭く、全蓋式のアーケードが架けられています。組合員数は52で、以前は商店街に大型店があり、業種面で総合性を持っていましたが、大型店の撤退以降、最寄品のない偏った業種構成となっています。このため、急速に空き店舗が増加し、商店街では積極的な空き店舗の対策を推進しています。この成果により、空き店舗や空き地が減少するとともに、飲食店やギャラリーなどの新業態の店舗が増え、“交流型”の商店街へと性格が変わりつつあります。

②　産学連携の事業

・産学協同のきっかけ

本地区における産学の連携は、市内にキャンパスを持つ名古屋学院大学の「まちづくり研究入門」の講義や学生らのまちづくり研究サークル等の大学及び学生側からの働きかけがきっかけとなっています。商店街がそれに協力する形でスタートし、以降、双方のさまざまな活動や事業に広がり、街の活性化に成果をあげています。

・“マイルポスト”の開店

商店街の中に、平成14年９月に、名古屋学院大学と学生ＮＰＯが経営するまちづくりカフェ“カフェ＆雑貨マイルポスト”を開店しました。約100㎡のスペースに、喫茶店と雑貨の販売コーナーが設けられています。普段は地域のコミュニティサロンとしてのカフェを営業し、講演会やミニＦＭ放送などのイベントを随時開催しています。

女性１人がマネージャーとして学生課から派遣されているのを除いては、店長を含めてすべて学生がローテーションを組んで現場を担当しています。単位の対象となる学外授業として位置づけられており、店舗の賃貸借契約は家主と学校が行っています。

・“クリック＆モルタル学生の店”の展開

雑貨コーナーとバーチャルショップを手がけている“クリック＆モルタル学生の店”のメンバーが、地元業者と共同で陶製の携帯アクセサリーセットを開発し、雑貨コーナーとバーチャルショップで販売して、好評です。

・“まちづくりワークキャンプ”の開催

名古屋学院大学の学生たちが、商店街の空き店舗に寝泊りしながら、１週間の“まちづくりワークキャンプ”を開催しました。掃除や看板補修などの作業をしながら、商店街の人たちとの交流を図り、まちづくりのあり方を考えるとしています。

・“シャッター画”の制作

商店街の空き店舗部分に賑わいを出すため、シャッターイベント大会を開催し、名古屋学院大学の学生の手を借りて“シャッター画”を制作しました。大学では、地域貢献になるとして、大学祭のプレイベントとして企画しました。

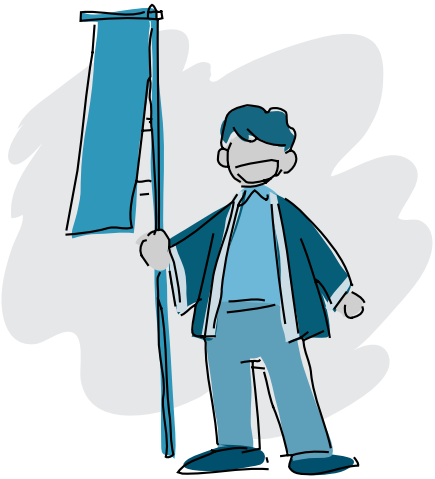
③　関係者の評価

・商店街の評価

本事業は、銀座通り商店街にとって、商店街の元気作りに大きく寄与し、衰退が止まらなかった商店街を上向きに変えた功績は大であるとしています。この点で、商店街において、大学、学生に先導されながら進んだ産学連携事業の評価は高いものがあります。

・大学の評価

大学の実践的教育カリキュラムとの連携により実学教育のサテライトとして活用しています。これらの点で、本事業は、大学から地域への一方的な奉仕活動ではなく、地域との連携を深めながら、大学としての目標に対する評価が、大学、学生ともになされています。



当パンフレットに関しましては、全国商店街振興組合連合会までお問い合せ下さい。

全国商店街振興組合連合会

〒104-0041 東京都中央区新富１丁目９番１号
新富191ビル７階

ＴＥＬ　03－(3553)－９３００(代表)
ＦＡＸ　03－(3553)－９３０３
http://www.syoutengai.or.jp/

平成１７年３月

全国商店街振興組合連合会